

鈴木昭教授退職によせて



退職によせて

歯学部口腔生命福祉学科長 鈴木 昭

平成16年度全国に先駆け「口腔や食べること(摂食・嚥下)」の専門知識を身につけ、保健・医療・福祉を総合的に担える専門家を養成することを目的に開設された口腔生命福祉学科は、この春には5期生を社会に送り出すまでにいたりしました。

私は、前任は新潟県社会福祉行政職員ですが平成17年度以降、社会福祉援助学を担当させていただきました。この間、口腔生命福祉学科は大きく成長し発展してきたと実感しています。この実感は、社会が口腔生命福祉学科卒業生を必要とし求めている、ことからきているような気がします。

改めて学科の創設に尽力された山田、前田両歯学部長の偉大な構想力とその慧眼にただ心服するばかりです。そして学年進行に伴いこれを学科教員一丸となって目に見える形にしていくそれぞれの教員の姿は、学生を感化する力となりなによりも学生にとって医療・福祉人の多彩なモデルとして映っているはずで、学科の伝統をつくりあげていく同時代を共有できたことは、私の人生後半の大切な財産です。

口腔生命福祉学科の掲げる理念と目標は、今や時代のメインストリームです。食べることをとおして人々の健康と幸福な生活を目指し地域をプロデュースし、脚色していく人材、言い換えますと歯科衛生士と社会福祉士の知識、技能を備えた人材が活躍する社会が用意されてきている、ということですが。

卒業生の進路をみていくと社会のあつい期待が伝わってきます。まず病院24%、診療所28%ですがこの中には、歯科衛生士のほか医療ソーシャル

ワーカーMSWとしての採用が約3割含まれます。また、大学院進学が16%、行政13%、福祉施設8%、そして教育・企業・団体11%という内訳になります。医療機関、行政、福祉施設等いずれにおいても歯科衛生士、社会福祉士の両資格を取得していることが採用する側からしても魅力に映るようです。

口腔生命福祉学科では、4年間にわたる学業の集積が卒論にあたる「口腔保健福祉特論」なのですが、これがすごいです。食べる、話すという口腔機能に関する専門的知識をもち、保健医療福祉を総合的に担っていくことは、とりもなおさず自然科学、人文社会科学に通底する人間理解と支援の「知」を見つけ出す営みです。このことはたやすいことではありませんが、特論のテーマを見ているとこの難しい課題を見事に乗り越えていることに感心させられます。特論の発表会は毎年の楽しみでした。

これまで命の伸長は医療が、暮らしは福祉が担ってきました。これからは少子・高齢社会にあっても命も暮らしも包摂したかけがえのないその人の人生を応援していくことが求められています。命、暮らし、人生いずれも life です。保健、医療、福祉一体化の謂です。まさに口腔生命福祉学科のアドミッションポリシーそのものですが、学生は4年の間にこれを具現化し卒業していきます。person-in-contextとしての人間をまるごと理解し応援する力を身につけていく様にはいつも感動させられました。この背景にはもちろん学生一人ひとりの資質や努力はいうまでもないので

すが、学部をあげて推進している problem based learning PBL 学習と新潟大学 university という学習環境も大いに働いています。

溢れるパッション、ミッション、そして持続するテンションの口腔生命福祉学科で充実した毎日

を送ることができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にお世話になりました。

新潟大学歯学部そして口腔生命福祉学科の今後の一層の発展を祈念して退任のごあいさつといたします。



鈴木昭教授ご退職によせて

口腔生命福祉学専攻福祉学分野 大内章嗣

鈴木昭教授と初めてお会いしたのは、2004年の晩秋だったと思います。同年4月に開設した口腔生命福祉学科の2年次専門教育の開始に向けて、見学実習の学生受け入れなどをお願いするために、中央福祉相談センターに伺った時でした。所長室でお話させて頂いたのはほんの短い時間だったと思いますが、非常に柔らかい物腰のなかにも、筋が一本通った厳しさを秘めている方だという印象を持ったのを今でも鮮明に覚えています。

鈴木教授は山形県酒田市のご出身で、1970年に新潟大学人文学部哲学科心理学専攻をご卒業されました。その後、新潟県採用となられ、保健所での精神衛生相談業務を皮切りに、以来、新潟県の福祉行政に一貫して取り組まれ、民生部障害福祉課参事、新星学園長、緑風園長、コロニーにいがた白岩の里所長など、数々の要職を歴任された後、2002年から中央福祉相談センターの所長に就任されていました。

実はこの時、3年次から始まる福祉系専門科目の開設準備に向けて、県庁から福祉職の方を教員として派遣して頂けるようお願いしている最中でした。その際、候補として漏れ聞こえてきていた鈴木所長というのはどんな方だろうとお目にかかりに伺ったというのがその時の訪問のもう一つの目的でした。

鈴木先生には2005年4月から口腔生命福祉学科助教授にご就任頂くこととなりました。今現在も改めて思いますが、鈴木先生に巡り合わせて頂いたことは、口腔生命福祉学科にとっても、そして私個人にとっても、とても大きな幸運だったと思います。

鈴木先生は当学科就任直後から、2年次の早期臨床実習Ⅱ日で学生の引率・指導でご尽力頂いたほか、その豊富なご経験や人脈を生かして、次年度からの福祉系専門科目のカリキュラムの準備を

進めて頂き、県・市をはじめとした関係機関・関係者とも精力的に折衝・調整して頂きました。

以降、2006年には口腔生命福祉学科教授に就任され、本格的に始まった社会福祉言論、児童福祉総論、社会福祉現場実習などの福祉系専門科目で全体のコーディネートに、実際の講義・実習指導担当にと、大車輪のご活躍を頂きました。口腔生命福祉学科の卒業生が1期生から全国でもトップレベルの社会福祉士国家試験合格率を達成し、福祉行政、高齢・障害福祉施設など、多様な進路に就職できたのも、鈴木先生のご尽力があつたことでした。

2008年4月からは大学院修士課程の設置とともに、学科長にご就任され、福祉と口腔保健医療を繋ぐ口腔生命福祉学科・専攻の象徴的存在としても、実際面での支柱としても、学科・専攻を引っ張って頂きました。

また、鈴木先生はこうした大学内の業務の傍ら、新潟市社会福祉審議会委員、同児童福祉専門分科会児童養護部会長など、様々な福祉関係の審議会・委員会の委員をお務めになるとともに、多くの福祉関係の学会や研修会で講演をなさっておられました。こうした場でも、「被虐待児童に対する歯科保健指導などの歯科的介入が、児童の自尊心や自己効力感の醸成に有用である」等の福祉と口腔保健医療の連携の必要性を積極的に発信して下さいました。

先生は趣味も手抜きなく取り組まれるご性分で、写真が玄人はだしなのはご存じの方も多いと思いますが、とても趣味のレベルとは言えないような立派な草花や野菜を育てておられ、旬の野菜などを先生から頂くのが、学科教員の楽しみでもありました。

そんな鈴木教授が一時、体調を崩され、食事制限をしなければならなくなった時も、ご自分で毎

食のカロリー計算をされ、好きな日本酒もきちんとコントロールされて（幸い、主治医の指示は禁酒ではなかったようです）、体重・体調を管理されていたのは、意思が強く、ご自分に厳しい先生のお人柄の表れだったと思います。

7年間という、思えばあっという間の短い期間ではありますが、鈴木先生にお世話になったこと、楽しい思い出を挙げればとても限られた紙面では

書き尽くせそうにありません。

鈴木先生、本当にありがとうございました。先生からはいつもの口調で「甘えなざるな」と諷められそうですが、呉々もご自愛頂いたうえで、引き続き口腔生命福祉学科・専攻を厳しく、そして暖かい目で見守って頂きますようお願いいたします。

